審査結果の要旨

氏　名　川島賢二

川島堅二氏の博士学位申請論文「シュライアーマッハーにおける弁証法的思考の形成」は、最近発見され２００２年に刊行されたシュライアーマッハーの１８１１年講義録にもとづいた最初の研究であり、これによって氏はシュライアーマッハーの弁証法的思考の全体像を世界に先駆けて提示することになった。と同時に、その宗教的思索の軌跡も改めて再構成された。

序論（直感期以前）では、シュライアーマッハーが、ヘルンフートの敬虔主義、エーバーハルト、カント、ヤコービ、スピノザなどとの取り組みをへて、「直接的概念」としての「存在の感情」など、後の諸時期にも通底する超越論的基礎概念を構築したことが確認される。さらに、後に弁証法へと展開される有限者（個）と無限者（普遍）の関係性の問題が追求されたことも重要である。

続く第Ｉ部直感期では、ドイツ初期ロマン派との出会いの中で、『宗教論』初版、『独自録』等、最初のまとまった著作群が著される時期が扱われる。特に重要なのは、「宗教」と「理論」という二大テーマの初期的展開、また社交理論と個体化理論の問題や、ロマン派にたいしてはかれの「批判的同志」というスタンスの問題などである。

第Ⅱ部批判期では、直感期に芽吹いた思想が、カント、フィヒテ、シェリングらとの批判的関わりの中で学問的に練り上げられてゆくプロセスが述べられる。また特に、ヘーゲルとの対決において形成されたシュライアーマッハーの弁証法が、プラトンに淵源することが突き止められる。すなわち、かれの弁証法は、ヘーゲルの、運動する純粋思惟の自己意識における、「止揚としての弁証法」ではなく、互いに語り合う諸個人の共同性における、「相互性の弁証法」なのである。

第Ⅲ部体系期では、つごう６回の弁証法講義にそくして、「絶対者」「神」「世界」等の概念・思想の展開が跡付けられる。ここでは、シュライアーマッハーの弁証法的思惟の形成プロセスが、同時にかれの宗教思想の形成プロセスとして述べられ、特に次の２点が重要な貢献となっている。第一は、かれの中心的テーマである直接的自己意識における超越論的根拠（神）の認識がすでに１８１１年の弁証法講義以来のものであること、第二に、神と世界との関係が一と多の量的なものから一者と他者の質的なものへと変容することがすでに 1818/19 年講義以前に生じていたこと、また、この変容は弁証法自体の内的発展の結果であること。これらの点は、いずれも従来の多数説を覆すものである。さらに、シュライアーマッハーのこのような弁証法的思惟は、かれの神学的思惟そのものをも根底から規定するものであり、それは「生の弁証法」と呼ばれるべきものであったとされる。

以上の川島氏の研究は、なお最近の諸研究とのより十分な対話が望まれるという面がありはするが、新たな資料にもとづく最新の研究成果としてきわめて高く評価でき、よって本審査委員会はこれを博士（文学）にふさわしいものと認める。また補遺として付された１８１１年講義の部分的（序論、超越論部門）再構成は、本論に劣らず今後の研究に大いに裨益するであろうことを付言しておく。